2019年9月15日　中原キリスト教会・日曜礼拝

**「十の災害」**

聖書箇所:出エジプト記7:14-25

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

本日はモーセ五書の二番目の文書である出エジプト記からです。お読みいただきました

のは第7章の一部ですが、まず、出エジプト記の全体について概観しておくのが良いでしょう。出エジプト記の英語名はExodusと言いますがこれは出エジプト記のギリシャ語訳の文書名から来ており、「脱出」の意味です。イスラエルの民が奴隷の状態にあったエジプトから脱出し、カナンの地に向かう物語を含んでいる文書だからです。イスラエル建国の歴史を映画化したものに「Exodus」というタイトルの映画がありますが、これは、ヨーロッパにおいて迫害されていたユダヤ人がそれらの地を脱出し、イスラエルの地に移住することを出エジプトの物語りになぞらえたものです。ヘブル語原典の文書名は「shemu:t」です。

出エジプト記の最初から2番目の単語であり、「名前」の複数形です。これはイスラ

エルの十二部族の名前のことを指しています。1:2-5に具体的に十二部族の名前が挙げられています。「ルベン、シメオン、レビ、ユダ。/イッサカル、ゼブルンと、ベニヤミン。/ダンとナフタリ。ガドとアシェル。/ヤコブから生まれた者の総数は七十人であった。ヨセフはすでにエジプトにいた」とあります。ヨセフを含め12部族になりますが、ヨセブ族はマナセとエフライムに分かれます。また更にマナセ族は与えられた土地の相違から、2つの半マナセという部族に分けて考えられますので、これらを考慮すると14部族になります。このうち、ユダ族、ベニヤミン族、シメオン族に与えられた地が南王国即ちユダ王国になります。それ以外は、他民族に奪い返されるか、北王国に所属することになります。レビ族は例外です。祭司を務める部族とされ土地は与えられませんでした。このレビ族からモーセが出ることになります,

この文書は出エジプトの物語りに加え、十戒を含む、イスラエルが守るべき律法の基本

的な内容とエルサレム神殿の原型となった幕屋やそこで礼拝する時の祭司の服装等につい

ての主の命令を含んでいます。なかでも十戒は律法の中心をなすものであり、そのうち、

その後、最も重大な規定として扱われたのは安息日規定です。もちろん、律法の書である

申命記にも叙述があります。これら律法は古来からのイスラエルの伝承に根拠があるもの

と推測され、出エジプトの時代、更にはアブラハムの時代にまでさかのぼる、と考えられ

る律法も一部あります。それらの伝承と出エジプトの歴史物語伝承が捕囚から帰還したBC4c頃に集大成されて今の「出エジプト記」になった、と推定されています。律法についてだけで言えばBC7cのユダ王国ヨシヤ王の時代に在る程度まとめられていた、と考えられます。ユダヤ人の古来の伝統はモーセ五書すべてモーセが著者とされていましたが、実際は、かなり長い歴史の中で形成された文書である、とするのが妥当でしょう。

本日の箇所に至るまでの内容を概略的に見てみます。1章は序文と言うべきもので、イス

ラエル十二部族とモーセ出生のいわれ、について記した部分です。エジプトの王パロはイ

スラエル人の赤子をすべて殺せと命じますが、それを逃れて、葦の茂みに隠されたモーセ

は王妃に発見され助かります。モーセは成長して、イスラエルの民が奴隷労働に苦しんで

いるのを見かねエジプト人の工事監督者を殺してしまい、ミデアンの地即ちアラビアに逃

れます。そこで、主なる神から、預言者としての召命を与えられます。モーセは固辞する

のですが、自分の兄アロンが代わりに述べる者となる、という主なる神の言葉があり、預

言者の任を受けます。そしてモーセはエジプトに帰還し、エジプトの王パロにイスラエル

の民を自由にしてエジプトを去るのを許せ、とせまりますが、王はまじめに取り扱っても

くれません。このため、主なる神はエジプトに10の災害を齎し、イスラエルの民を解放さ

せようとします。モーセ80歳、アロン83歳の時です。

10の災害は7:14から11章の最後までに記されています。①ナイル河の水が血になること、②かえるが大量に発生すること、③ぶよが大量発生すること④あぶが大量発生すること、⑤家畜の疫病が蔓延すること、⑥人と獣に腫物ができること、⑦突如、雹がふること、⑧いなごが大量発生すること、⑨真っ暗闇が蓋うこと、⑩すべての初子が殺されることの、

10です。この第一の災害、血の川の前に、アロンの杖が蛇になる、という奇跡が記されて

いますが、これを一つの災害と数え、最後の初子の話は「過越し祭」につながる特別なこ

となので十の災害から外して数える数え方もあります。ここでは杖が蛇になる話は前書き

のように考え、血の川から初子までを十の災害と理解する伝統的な考え方を踏襲いたしま

す。このお話は全体としては、いろんな角度から解釈することができますが、聖書の本文

にそって一通りの理解をすることと致しましょう。

まず、前書きと申しました、杖が蛇になるところです。主はモーセとアロンに、"アロン

の杖をパロの前に投げると蛇になる"と言います。ここでの蛇はヘブル語では「tani:n」と

言い、創世記でエバをそそのかす蛇「na:hash」とは異なる言葉です。創世記の蛇が一般

的な蛇ということばであり、ここ出エジプト記7:9-10の蛇は竜のような蛇です、小さな蛇ではありません。しかし、12節では「アロンの杖は彼ら（呪術者）の杖をのみこんだ」と言われていますから、呪術者の蛇は小さく、アロンの蛇は巨大で、この小さな蛇をのみこんだ、と理解できます。このところはむしろ、呪術者が蛇に変えたのはサタンの力によるもので、アロンが蛇に変えたのは神による奇跡と解釈すべきところでしょう。もう一点注意すべき点は、このエジプトに齎された災害の話の背後には創世記の記事があり、主なる神は、エジプトをその罪のため、世界の初めのカオス(混乱)の状態に戻す、という意味を持たせている、といえます。そのカオスの地エジプトからイスラエルを救済する、ということは終末におけるイスラエルの回復を意味するものでもあり、この十の災害の物語りが黙示録の描写と類似してくる、ということにもなります。

そして第一の災害です。7:14-25までであり、本日お読みいただいた箇所です。主なる神

は"アロンの杖でナイルの水を打つと水は血に変わり、ナイルの魚は死に、臭くなり、水

を飲むことを忌み嫌うことになる"と、言われます。神の恵みの賜物であるナイルの水が

飲めなくなる、というのです。それはパロが「わたし(神)が主であることを知るように

なる」ため、と言われています。主なる神が「主」として崇められるようにするためだ、というのです。この表現は後にも出てまいります。災害がなぜ起きるのか、にっいての聖書の考え方が示されています。22節によれば、ここでも呪法師が秘術を使っておなじようなことを行った、と記されています。ナイル川は7月の水量がピークに達してからたびたび、プランクトンの異常発生し、川が赤みを帯びる、ということがあったそうです。「赤潮」と言われています。それが極端な形で奇跡的出来事として起きたのでしょう。新改訳で呪法師と訳されている部分はフランシスコ会訳では「魔術師」となっています。英訳のNIVもmagicianとなっていますので、魔法使いのようなもので、神官とは全く関係ない人々と思われます。

第二の災害はかえる、です。8:3で「かえるがナイルに群がり、上って来て、あなたの家

に入る。あなたの寝室に、あなたの寝台に、あなたの家臣の家に、あなたの民の中に、あ

なたのかまどに、あなたのこね鉢に、入る。」と言われています。そして、かえるがエジプ

トの地をおおった、といわれています。「赤潮」のプランクトンを餌に大量発生したのでし

ょう。通常の年も、7-9月にかえるが発生していたようです。ここでも呪法師がかえるを血

の上に這い上がらせた、と言われており、まだ魔術師の神通力の範囲内のことであったよ

うです。しかし、パロはこれには参ったようです。パロはモーセに執成しの祈りを願い出

ます。モーセはこれに答えてあげるのですが、のどもとすぎれば、の喩えのようにパロは

もとの強情な態度にもどってしまい、イスラエルを解放することなどしませんでした。か

えるは新約聖書にも出てきます。黙示録16:13で汚れた霊の喩えとしてかえるがあげられています。ナイル川のかえるはあかがえる、ひきがえる、が主だったといわれています。レビ記11:10-11で忌むべきものとされ、食してはならない、とされています。

第三の災害は「ぶよ」です。かえるの群れが死んで腐るとそこに小さな虫が群がるよう

になるさまを言っているのだと思われます。「アロンは手を差し伸ばして、杖で地のちりを

打った。すると、ぶよは人や獣についた。地のちりはみな、エジプト全土で、ぶよとなっ

た」と言われています。「地のちり」がぶよになったといわれています.「地のちり」は創

世記で神様が人間を作った時の「ちり」です。人間の創造物語が、ここではなんと「ぶよ」

を作る話になっているのです。創世記の創造物語が逆回転し、カオスに戻ることになって

います。呪法師はこんどは力が及びません。ちりをぶよに変えることができなかった、と

書かれています。呪法師は杖を蛇に変える奇跡、川を血染めにする第一災害、蛙を発生さ

せる第二災害までは自分たちもなんとかやれたのですが、第三災害以降は撤退です。これ

から後は第六災害の腫物のところでも失敗し、これ以外は登場しません。ぶよ、というヘ

ブル語「kina:m」の原語には蚊の意味も持っていますので、伝染病の原因になっていた可

能性もあります。マタイ23:24でイエスさまがパリサイ人に対し、ぶよのような小さいものはきれいに取り除こうとするのに、らくだのような大きなことについてはそれをただ飲み込んでしまうだけだ"と皮肉を言われています。呪法師たちはこの奇跡を「神の指」の働

きだと言っています。即ち、神の力が働いている、ということを認めている、ということ

です。「神の指」という表現は聖書では数回出てきます。新約聖書では一か所ルカ11:20でイエス様が「神の指によって悪霊どもを追い出す」という表現で用いられています。第四の災害以降には用いられていませんが、背後に「神の指」が動いていた、と解釈して差し支えありません。

第四の災害は「あぶ」です。8:21で、「さあ、わたしは、あぶの群れを、あなたとあなた

の家臣とあなたの民の中に、またあなたの家の中に放つ。エジプトの家々も、彼らがいる

土地も、あぶの群れで満ちる。」と言われています。あぶ、というのはヘブル語で「aro:b」

ですがはえの類です。はえは、いろいろな伝染病の原因になります。おそらく、「ぶよ」と

同様、病気を運ぶ虫が繁殖した、ということでしょう。あぶない事態になりつつありま

す。それにしても人間とばい菌との戦いはまだ続いているのですから、すさまじい歴史で

す。8:22で「わたしはその日、わたしの民がとどまっているゴシェンの地を特別に扱い、こには、あぶの群れがいないようにする。それは主であるわたしが、その地の真ん中にい

ることを、あなたが知るためである」と言われています。これはイスラエルの民は安全に

された、ということを意味します。イスラエルとエジプトの民を区別することがここで始

まっています。最後、初子の死にさいしてもイスラエルの民の場合、かもいに血をつけて

おくと神様が「過越して行く」ということで初子が助かる、という話まで続きます。選び

の民への特別恩寵です。創世記の逆回転状況のなかでイスラエルはカオスに向かわず、と

どまることが赦されているのです、私たち新しいイスラエルに対しても主なる神は同様の

恩寵を与えてくださっているはずです。パロはここに到って「おまえたちの神にいけにえ

をささげよ」と若干譲歩的な態度にでてきます。モーセはきっぱりと断ります。いけにえ

の内容がエジプトの慣習と異なるから石で打ち殺されるかもしれない、というのです。イ

スラエルの生蟄は牛と羊ですが、牛はエジプトではイシス神に属し、羊はアモン神に属す

るとされていましたから、石打の刑にされるというのはありうることです。モーセが「解

放しろ」と言うのに対しパロは「近くにいるなら良い」と言いますが、結局また強情なパロに戻ります。8:25以降のモーセとパロのつばぜり合いの交渉もなかなかのものですが、パロの"もううんざりだ。だが居なくなったらこまる"という揺れる気持ちが興味深いとこ

ろです。

第五の災害は家畜の疫病です。さきほどのぶよ、あぶによる伝染病が家畜に広がったの

でしょう。9:3-4で「見よ、主の手は、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に激しい疫病が起こる。/しかし主は、イスラエルの家畜とエジプトの家畜とを区別する。それでイスラエル人の家畜は一頭も死なない。」と、あります。この災害では人間は含まれていません。先般も、鶏の伝染病で沢山の鳥が殺され埋められましたが、大変なことです。その業者は保証はもらえると言っても再起不能でしょう。このエジプトでの出来事はこれ以上の事だったに違いありません。補償もあるはずもないでしょう。ここでもイスラエルとエジプトが区別されていることに注意してください。

第六の災害は腫物です。モーセとアロンに"かまどのすすを両手いっぱいにとって天に

向けて撒き散らすと細かいほこりとなって、人と獣につき、うみの出る腫物となる"と言

われています。とうとう人間の体にも災いが来ました。ヘブル語では「sehi:n」という言葉ですが、「天然痘」のことではないか、という説もあります。言葉自身は「はれあがったもの」です。この腫物が先ほどの呪法師にも移ったと書かれています。「かまどのすす」から災害が齎された訳ですがこれは先ほどの「地のちり」と並行的に書かれている、といえます。即ち、「ちり」による創造が逆回転してカオスに戻っている、と言えます。これでもパロはイスラエルを解放しようとはしません。おそらく部下も民も"いいかげんにしてくれ、

もうイスラエルなんか行きたいところに行かせてやれ"という気持ちでしたでしょう。為

政者、支配者の欲深さが想像できます。結局、身近に不幸が及ぶまで、権力に執着すると

いうのが支配者のさが、なのかもしれません。

第七の災害は雹です。この災いに関連する箇所は一番長いです。9:13-35です。主の言葉もかなり厳しい言葉になってきます。疫病をもってパロとその民を打つことも出来るが主の力を知らしめるため押さえておく、と主は言われます。そして9:18で「今度は、あすの今ごろ、エジプトにおいて建国の日以来、今までになかったきわめて激しい雹をわたしは降らせる。」と言われています。そしてすべての人と獣を非難させよ、と言われています。「主の言葉を恐れた者」は救われ、「主の言葉を心に留めなかった者」は滅ぼされます。この2つの表現の対照的表現はイスラエル信仰の根本を表現しています。エジプトは熱帯地域ですので雹が降ることはめったにないのですがそれでも雹が降ったことはあるようです。時期的には1月頃ということです。甚大な農作物の被害になります。出エジプト記以外ではヨシュア記、ヨブ記、詩編、イザヤ書、エゼキエル書、ハガイ書に電の記述があり、黙示録にも終末の表現に雹が現れます。黙示録16:21では「また、一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。」と言われており、一タラントとは35kgです。そして雹は雷を伴います。また、8:23では「火が地に向かって走った」と言われています。落雷のことでしょう。「建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった」と言われています。しかしここでも「イスラエル人が住むゴシェンの地には、雹は降らなかった」と記されています。選びの民の守りは続いています。そして遂にパロは悔い改めたようです。9:27-28では「そこでパロは使いをやって、モーセとアロンを呼び寄せ、彼らに言った。「今度は、私は罪を犯した。主は正しいお方だ。私と私の民は悪者だ。/主に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。私はおまえたちを行かせよう。おまえたちはもう、とどまってはならない。」と言っています。ここで使われている、「罪」、「正しい」、「悪者」はそれぞれ旧約聖書での典型的言葉が使われており、信仰的態度への回帰即ち悔い改めが為されているようです。そしてとうとう「出て行ってくれ」とまで言うようになりました。しかしモーセは言います。9:30で「しかし、あなたとあなたの家臣が、まだ、神である主を恐れていないことを、私は知っています。」と言っています。"もう災いは沢山だと思っているけれども、心から、自然の脅威の前に恐れおののく気持ちはない"と言っています。雷によって着物の原料となる亜麻と食料としての大麦はやられたがまだ収穫の季節ではない小麦やスペルト小麦(裸麦)は大丈夫だったからだ、と言われています。このようなエジプト人の態度を見ていると原発に関する日本政府の態度が透かし的に見えるのは私だけでしょうか。モーセはパロの希望に沿って雷と雹を止めますが、例によってまたパロと家臣たちは「強情」になります。パロの心はかたくなになります。

エジプトに下された災いも最後に近づいています。第八の災いは「いなご」です。体の

大きい「とのさまいなご」と推測されています。10:2にこれらの災いは「わたしが主であることを、あなたがたが知るためである」と言われています。主なる神が主として崇められるようになるために災いや苦難が与えられる、という理解は先にも出てきましたが旧約聖書の根本的理解の一つです。裏返して言うと、このような事態にならなければ、人間は、

全能の神を心から承認することはない、ということです。残念ながら自分を含め真実です。

モーセとアロンは主の言葉として「いつまでわたしの前に身を低くすることを拒むのか」、

と言っていますが、主の前で謙遜になるのは難しく、主なる神を忘却した生活を送る場合

が多い、ということです。雹の害をのがれてもいなごは残ったすべてを食い尽くす、と言

われています。かってなかったことだ、と言われています。とうとう家臣たちは"このま

まではエジプトが滅びます。イスラエルを行かせてください"とパロに直訴します。とこ

ろがパロは壮年の男だけ行って礼拝をしてくるだけなら認めよう、と言います。これは妻、

子供、家畜を人質代わりに置いておけば、帰ってきてまた働いてくれるだろうという甘い

期待が背後にある考えです。主なる神はこのようなパロの条件付き解放など許すはずはありません。遂にモーセが手をさしのばすと東風がいなごの大軍を運んできます。エジプトはしばしばいなごの被害にあったようです。1926-27年に発生したいなごの大群はエチオピア、ケニヤ、コンゴを襲い被害は1932年まで続き、約800万平方キロの被害となった、と言われています。日本国土の20倍以上の地域がやられたのです。いなごの被害はヒッチコックの映画で有名です。聖書ではヨエル書が有名です。ヨエル書1:4では「かみつくいなごが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、ばったが食い、ばったが残した物は、食い荒らすいなごが食った。」と言われており、2:25では「いなご、ばった、食い荒らすいなご、かみつくいなご、わたしがあなたがたの間に送った大軍勢が、食い尽くした年々を、わたしはあなたがたに償おう」と記されています。日本では食料として重宝がられましたが、アフリカのような大群では手も付けられません。パロはもう一度悔い改めの風をみせます。モーセの祈りによって東風が西風に変えられ、葦の海に追いやられた、と言われています。エジプトの地にはシロッコ風という熱風がありますからここで風と言っているのはそのことかもしれません。葦の海はギリシャ語訳では「紅海」になっていますが今言う紅海ではありません。葦の海はエジプトの地中海側のメンザレ湖の南はし、と推定されていますから、当時はメンザレ湖と今の紅海を結ぶスエズ運河の地域は繋がっていてメンザレ湖も含めて紅海と言う言い方があったのかもしれません。この葦の海が海の割れた場所と推測されています。しかし、例によって「かたくな」です。

第九の災いは「暗闇」です。ヨエル書2;2にもいなごの後を「やみと、暗黒の日。雲と、

暗やみの日」と表現しており、闇が蓋ったと考えられます。三日間真っ暗闇でお互い見え

ず、歩くことも出来なかった、と言われています。「しかしイスラエル人の住むところには

光があった」とされ、イスラエルとエジプトを区別する神の働きが生きています。もうパ

ロはたまらず、出て行け、といいますが、羊と牛は残していけといいます。当然モーセは

拒否です。全焼の生賛に必要、というのがその理由です。そのため、パロは「心をかたく

なにし、彼らを行かせようとしなかった」とあります。ここで「主はパロの心をかたくな

にされた」と言う表現と「パロの心は強情になり」の二つの表現がどのように配列されて

いるかをみてみます。「かたくな」表現の方は主の能動的働き、「強情」表現の方はパロの

人間的心の動きのような差がみられます。前触れの杖を蛇にする箇所、第七の災害の雷の

ところと二箇所は、このかたくなと強情が両方あります。かえる、あぶ、家畜の疫病の三

か所は「強情」表現であり、残りはこのあとの「初子」の災害を含め6つが「かたくな」表現です。両表現があるのも含めれば10災害のうち、七災害が「かたくな表現」です。旧約聖書全体でみると.「かたくな(ka:be:d)」が49回、「強情(ha:zaq)」が290回で圧倒的に「強情」表現の方が多いですが、十災害に関するパロについては「かたくな」表現の方が一般的です。かたくな、の使われ方としては「重い」、「偉大な」、「厳しい」、「困難な」と言う意味での使用が多く、「かたくな」という否定的な意味で使用されるのは少ないといえます。英訳聖書のNIVではunyielding(屈しない)と訳されています。要するに「悔い改めない」態度です。主があえてパロを悔い改めないようにしている、ということです,パロが悔い改めないことこそ、主なる神の計画即ち摂理なのです,

最後十番目の災害は初子の死です。これは自然災害とは異なりますが、民族の存続に関

わる重大な災害です。初子は神に捧げることになっていますから、初子が殺されると言う

のは神との契約を履行できず、神からの恩寵を受ける資格を失う、ということを意味しま

す。11:2に少々奇妙な表現があります。神様の言葉として「さあ、民に語って聞かせよ。男は隣の男から、女は隣の女から銀の飾りや金の飾りを求めるように。」と言われています。

これはエジプトでの苦労の見返りとして、金銀の報酬をもらっても良い、ということです。

そのために、神様はエジプト人がイスラエルの民に好意を持つようにされた、というので

す。エジプトの民の方からすると、本当は早くいなくなってほしい、と思って金銀でもあ

げたのかもしれません。11:9では「エジプトの国の初子は、王座に着くパロの初子から、ひき臼のうしろにいる女奴隷の初子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。」と言われています。エジプト全土で「大きな叫びが起こる」と言われています。3:9では「見よ。今こそ、イスラエル人の叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプトが彼らをしいたげているそのしいたげを見た。」といわれ、イスラエル人の「叫び」が主に届いたと言われていますが、11:9の叫びもこの「叫び」と同じ言葉です。これは詩篇107篇などで繰り返し記されている「叫ぶ」(tsa:aq)の名詞形です。詩篇107:6をお読みします。「この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。」とあります。イスラエルの民が主に向かって叫ぶのがこのエジプトでは最後の災いの結果としての叫びになっているのです。救いは来ません。またイスラエルの家畜については安全が守られる、と言われており、選びの民イスラエルの効果が示されています。そして、モーセとパロは決定的交渉決裂の状態となります。しかし「主はパロの心をかたくなにされ、パロはイスラエル人を自分の国から出て行かせなかった」と記し、十の災害の記事が締めくくられています。12章は初子の殺害と過越祭のことになります。

以上が十の災害の説明ですが、私たち信仰者が真剣に考えなければならない基本的な問

題があります。一つは、ここにあげられている事柄はすべて歴史的事実と信ずるか、と言

う問題です。全くの作り話という見方は論外としても、有力説として、エジプトにあった

自然災害を素材として内容を誇張し創作した、というものがあります。伝承の底流にエジ

プトにあった災害があることは事実でしょうが、過去の歴史的事実を忠実に伝える、と言

う意味では比類のないイスラエル民族がそのようなことをするようには思えません。もち

ろん、全能なる神の奇跡を通しての働きに思いを致していないことも承服しがたい点です。

やはり、エジプトにおける災害が神の力で奇跡的規模として現出した、それが伝承として

継承されていき、逐次文書化され、それがBC6c頃まとまったものとなった、と理解するの

が納得性があると思います。十の災害の内容は6月から翌年4月位のエジプトの天候に符合しているので、この十の災害は1年かけて起きた出来事だ、という説もあります。他方でエーゲ海のサントリーニ島の大爆発によってこれらの災害が引き起こされ、その記憶が伝承として伝わったのではないか、という説もあります。火山噴火の時期が合わないという異論もあります。しかし、考えられない話ではありません。なにか大変な自然現象があって、その結果、通常では一年かけての災害が短期間のうちに起きた、と理解するのが妥当なところではないか、と思います。ノアの方舟の場合も古代にメソポタミア地域に大洪水があったことは間違いないにしても、それがノアの方舟の話の元になっているのかどうかは定かではありません。もっと根本的問題として、神話と歴史的事実とは明確に峻別できる、と考えることこそあやしい、のではないか、とも思います,このような考え方は近代以降の比較的新しい考え方であるからです。もちろん、両者を完全に一緒にしてしまうのは別の大問題です。聖書に示された考え方は、この神話と歴史の緊張関係の中にあります。科学万能主義もおかしいですが、歴史解釈における創作的要素をまったく否定するのもおかしなものです。神様の御意志がどのような形で働いているのか、を知るのが信仰者の歴史に対する目的です。

また、自然災害に関し、私たちはどのように理解すべきか、というテーマもこの「十の

災害」の話のなかで考えさせられます。神学の世界では「自然神学」という分野で論じられています。一方では自然災害は神様の人問に対する罰である、という考え方があります。

他方の極端は科学の進歩によりすべての自然災害を回避することがいずれできるようになるだろう、という考え方です。表立っては言わないけれど、無限の進歩を期待する科学信仰のような考え方が近代人の気持ちにはあるように思います。これはキリスト教信仰に反します。人間の被造物世界への理解は飛躍的に高まってきましたが、それによって、人間の考え、行動が主の望む方向に向かっているなどと到底言えません。むしろ逆に向かっているかもしれません。自然現象を通して神様がその意志を示す、という面をあまりに、軽視しているのが今の人間の姿です。すべて、人間に対する神罰である、とまでは言いませんが、神の怒りの現れかもしれません。全能の神は望めば自然災害が起きることを止められないはずはありませんから、それが起こったということは神様がそれが起こることを少なくとも許容している事は事実だと考えざるをえません。本日の聖書箇所のように、神が万物の主権者であることを知らしめるため、と言う考えに全面的に賛成する者ではありませんが、多くの場合、神様の人間に対する警告である、と解釈すべき、と思われます。原発については人間に対する警告と真摯に受け止めるぺきものと思います。私は原子力の平和利用即ち原発の推進論者でしたが福島原発事故を契機に考えをあらためました。日本のカソリックの司教団が原発廃止を訴えた文書を見ると、「原発は早くやめるべきだ」という確信を与えられます。十の災害のなかで繰り返し警告が与えられ、最後まで真の悔い改めをしなかったパロに与えられた裁きは「もう言い訳は赦されない」という厳としたものです。指導者の犯した過ちの結果は民に及びます。エジプトの臣下や民のように私は反対だった、と言っても、だめなのです。私たちキリスト者は神様の警告に聞こう、と声を発する必要があります。祈ります。

（御在天の父なる御神様、今日はイスラエルの民のエジプト脱出に際しての、十の災害から、自然による災害を通して、主なる神が、私たちに何を伝えられようとしているかについて考えさせられました。少なくとも、これら災害は、人間に対する、警告である、と思います。いかに、私たち人間が神様の警告を無視し、欲望に走っているかを思うものです。終末の日、主の日を待つ私たちが、神の国の証人（あかしびと）として、この警告を伝えるものとなることができますよう、私たちに知恵と力と、そして勇気をお与えください。主イエスの聖名（みな）により祈ります。アーメン）